

雑の研究

大岩 圭之助

共同研究「雑の研究」の一年目である 2015 年度の研究活動を要約するものとして、メンバー二人によるディスカッションをここに再録する。

<メンバー> 高橋 源一郎
大岩 圭之助 (コーディネーター)

1. 「雑」としての民主主義

高橋: 「雑の研究」の前に「弱さの研究」がありました。その研究の延長上で「雑」をやるということだと思います。雑というとまさに文字通り、非常に広がりのある概念なのですが、まずはぼくの興味のある「雑」から入ろうと思います。

この前、『ぼくらの民主主義なんだぜ』という本を出したんですが、そこで言いたかったのは、ざっくりいうと、民主主義というのは「雑」なんじゃないか、ということです。民主主義（デモクラシー）とは、デモス+クラシーで民衆による統治という意味ですね。

今ギリシャの民主主義の研究をしているんですが、非常に面白くて、今言われている民主主義とややニュアンスが違う。今「民主主義」というとき、ほとんど「代議制民主主義」と同じ意味で使われているでしょ。でも古代アテナイでの民主主義のエートス（精神）から考えると、代議制民主主義は反民主主義なんですよね。なんでかというところまず、デモス+クラシーはひとつ統治のシステムなので、どうやって決めるかが問題になってくる。もうひとつは決めるということに関しては統治するために必要なんだけど、決めない、つまり決める前どれくらい話し合うかが重要だということです。結局、統治のためには必要なんだけど、決めるっていうことは民主主義にとって実は最後にやってくる最悪のチョイス、これをどうやって引き延ばすか、もしくは決めないという方向にするかということに、最初の民主主義は知恵を絞った。具体的にいうのももちろん投票もやっていたんだけど、くじびきが多い。役人も陪審員も、ギリシャの民主主義では全くくじ引き+任期一年なんです。その反対に選挙+任期3年4年の代議制民主主義があるでしょ、これは根本的に考え方が違う。これはシステムを含めた話ですけど。その前に「話し合う」ことを何より重んじた。これが面白いところです。

ギリシャの民主主義の考え方はルソーに続いてるんですが、彼は、根本的に全員考えが違うということを重視していた。その共同体の構成員すべてがひとつひとつ違った考え方をもっているということを認めるというのが原理でした。どういうことかということ、要するに、決まらないということ。ルソーがいつているのは、古代ギリシャの場合、正式な市民が3万人、4万人いて、

その場合、3万通り、4万通りの考え方があある。これをひとつの意見に集約するというのもそもそも間違っている、でもやらなければいけない。ではどうするかというと、3万通り4万通りの意見が、異なったままでシェアするというのはどういうことかを考えた。ルソーの社会契約論はそこに重点をおいている。たとえば、党派をつくっちゃいけない。つまり3万人を4通りの考え方に分けると、自民がいて民主、維新、社民党、あと共産党がいて、5つ。そうやって、5通りの考えに分けていくと、わかりやすく、採決しやすい。けれど、そこに、もともとの意見の多様性はなくなっている。代議制民主主義は決めやすくわかりやすいが、そういう本質的な欠点をもっている。ルソーが一番批判したのはそこなんですよ、5通りしか意見がなくなったとたんに民主主義は死ぬ、と。ルソーの社会契約論には、最後まで党派はつくるな、と書いてありますね。

このようにもともと「雑」だったものが5つにまとめられた瞬間に、民主主義のもっとも重要な思想的な意味が死ぬ、というのがルソーの社会契約論の考え方。彼は代議制民主主義は奴隷制と同じだと徹底的に批判しているんですが、それはなぜかというと、投票を含めてそこで思考停止してしまうということでもあるんだけど、3万人の考えを3万通りの異なった意見のままに置いておかないということがだめだ、としています。ルソーは3万人の考えがばらばらのままで投票しろ、そしてそれで決まったらその結果には従えと書いています。結果は問題じゃないと言っている。そこも重要です。

民主主義の根本は個人個人、ひとりの意見が大切にされることですが、そのために全体の意見の中で自分の意見を見つめる時間を保証している。それが、ディスカッション熟議の時間です。雑は雑のままでもいい、それを保証しているのが民主主義だっていう考え方ですね。それは要するに代議制民主主義というシステムが民主主義だという考え方です。しかし、その場合民主主義は、統治の方法であり議案の選択の方法に過ぎない。民主主義は、デモス（民衆）とクラシー（統治）という言葉でできています。そして、デモスであることと、クラシー（統治）の間には深い裂け目が走っている。矛盾をかかえたまま制度をつくれるのかっていうのがルソー以来の難問で、まだ解決されていません。雑のまま、それを維持したままでどうやってシステムをつくっていくか。具体的にいうと、普通でいわれている民主主義と違った形の民主主義を、インディアン、アメリカネイティブなんかも持っていた。そういうところをさぐりながら、雑の観点から民主主義を見らるってことをやっていきたいな、と。

だから弱さの研究は、弱さを含んだ共同体のもつ強さ、という話をしたんですけど、今回は、こういう時代でもあるので、共同体一般から民主主義っていうシステムと考え方の今日的な意味をやってみたいなと思っています。

大岩：根本的な矛盾ですね。いかに多様性を犠牲にしないで共同体をまとめていくか。それを犠牲にしちゃったら、ルソーにいわせればそれは死なのだから。

高橋：それは奴隷制と同じだから。

大岩：だからそうせずに、どう折り合いをつけていくかが問題です。

高橋：もうひとつ、古代アテナイの民主制の特徴は、共同体の参加者の問題です。アテナイの市民というのは奴隷と外国人と女性は入っていない、そこはよく根本的欠陥といわれているんですけど、その規模がずっと3~4万だったそうです。いわれているのは直接民主主義が可能なのは3

〜4万ぐらいではないかということです。アテナイ自体がそうでした。

大岩：規模の問題ですね。自治体の最大限度はどのくらいか、という。

高橋：古代アテナイですごく重要だと思っているのが、市民に要請されていたことです。これはハードルがすごくきつくて、仕事をしたり、自分のための経済活動とか、プライベートに活動してもいい、それと別に、民会にでるとか議案についてディスカッションするとか陪審員をやるとか、公の仕事を必ずやらなきゃならない。時間配分で極端なことをいうと、プライベートと公が半々なんですね。要請されている義務としてはこれめちゃくちゃハードル高いよね。今の代議制民主主義では一般の国民には選挙で投票するときだけが、「公」に参加する時間になる。パブリックの役目っていうのはいってみれば3年間で2秒。これもまたルソーが批判したことなんですね。その瞬間しか参加していないじゃないか、と。

古代ギリシャは直接民主主義というよりも公の時間と私の時間を同じにしろという要請なんです。公の範囲はいろいろあって自分でディスカッションに出ることがひとつ、それから、国防のために兵士になって戦争に行く、陪審員になる、とか全部入ってる。これらを全部アテナイ市民の誇り高き義務として引き受けろというわけです。今の民主主義はハードルを下げたんですよ、そこまで出来ません、と。で、どんどん下げていった結果、3年に2秒になっちゃった。そのことと雑がなくなっていくことはリンクしていると思うんです。プラトンとかソクラテスとかアリストテレスは民主主義に批判的だったんですが、その批判は統治のところに集中しています。結局、移ろいやすい大衆の気持ちで決めなきゃならないじゃないか、とそのポピュリズムを批判しています。

プラトンが言っているように、全てをよく知った賢人王とか哲人王が決めるのが一番いい。確かに理屈にあってます。そのことと民衆が間違っているかもしれないけど自分で運命を決めるということは意味が違う。みんなで決めている、雑のままです。これは、なにをよきものとするか、という思想の違いでもあるんですけど、やっぱりソクラテスもプラトンもアリストテレスも民主主義を批判してるんですけど、批判するにたるだけの本質の問題がそこにはあったんです。

アリストテレスがアテナイ国政について論じたものが、最近発見されたんですが、ポピュリズムになるから駄目だと言いつつね、システムはよくできてると書いている。アリストテレスが特に興味をもって記述しているのは、くじ引き制です。アテナイ民主主義の思想には二面性があって、ひとつはすべての市民に参加を求めて誇り高き義務であるという、つまりアテナイ市民の人間性への信頼ですね。その反面くじ引き制をなんでやってるかという、一年以上公務をやると絶対腐敗してしまうという、人間性への不信です。だれか立候補してもらっても何年もやってるとそこに全部権力が集中して、腐敗するだろうということで、特にお金に関係することは。

大岩：くじ引き制にしないと。

高橋：そうそう、くじ引き制にするとそもそもだれになるかわからないんで、しかも一年しかやらせない。

大岩：最近も、くじ引き制をかなり真剣に議論してますね、欧米でも、とくに地方自治体では。

高橋：今は民主主義の問題がクローズアップされているけど、原理にさかのぼって、「雑」の観点で考えるべきだと思います。

2. 「雑」としてのローカル

大岩： そうなってくるとだんだん中央から地域へ視点が分散してくる。

高橋さんの話を、ぼくの考えていることとリンクするな、と思いながら聞いていたんだけど、今ぼくが注目しているのが増田レポート、「地方消滅論」、またそれをきっかけに沸き起こった議論です。あの増田レポートにはかなり危険な思想が含まれていると思って注意してみるようにしています。増田氏はまた、自民党と組んで、「地方創生」をぶち上げている。この流れを、一国主義的に考えてもわからない、世界的、世界史的な文脈の中で、しっかり捉え、批判することが大切だと思う。

ああいうものに中心で関わっている、いわゆるテクノクラートたちはグローバリゼーションの中で、ある種の専門性を持って台頭してきた人たちです。一昔前の自民党の代議士なんかより、ずっとソフィスティケートされたタイプの人たちです。それだけに始末が悪いとも言える。

一方、地方消滅論に対抗する面白い流れが出てきていると思うんです。ひとことで言えば、グローバルに対してローカル。地域に活路を見出す。地域からの再生こそが希望なんだ、と。それに対して「地方消滅」論の主張は、少し単純化して言ってしまえば、合理主義を徹底させて、中央を地域にまでもたらし、グローバルで日本をおおい尽くすということだと思う。TPP とともに、この「地方消滅＝地方創生」論こそ、グローバル化の最終段階、言わば「仕上げ」として考えられているのでは、と。

高橋： あれは要するに、地方はこのままいっても枯死するから中核都市だけ生き残るという話なんですね。

大岩： 人口のダム論といって、過疎の山村などを切り捨て、中核都市に人々を集めることで、地域を維持するという。過疎とか、限界集落とか、ひどい呼び方で呼ばれてきた集落は、官僚や政治家からすれば、この上なく非効率なんですね。それを正すために、コンパクトシティと呼ばれる効率的都市に分散していた人々を集めて、高層マンションに収容し、理想的な消費者に仕立てあげていく。

たぶん、ひとつのわかりやすいモデルが、今、大人気の武蔵小杉なんです。高層ビル群と巨大ショッピングモール。あの風景には正直驚きました。新しいからではなく、ぼくがまだ住んでいた頃のアメリカの再現、あるいは、ここ十年、二十年、韓国で進められてきた「未来都市」の後追いです。香港やシンガポールにも似ている。5年前くらい前に中国の地方都市でも凄い勢いで高層アパート群を建てて、農村の人口をそこに収容するという光景を見ましたが、それが武蔵小杉で起こっている。

徹底的にサービスを民営化して、つまりゆりかごから墓場まで、子育てから介護まで、グローバル大企業にまかせる。人々は基本的に、労働と消費以外はなんにもしなくていい。せつせと大企業のために働き、その給料でせつせと大企業の商品やサービスを買う。一挙手一投足が全部、経済市場につながって、効率的で無駄がない。ロボットや人工知能やドローンも活躍する一種の理想郷です。TPP が目指すのも、農業を会社の手に移すだけでなく、グローバル大企業が保険でも医療でも支配的になっていくことでしょう。

でも、それを進めている人たちは、もちろん悪意ではなく善意でやっているわけでしょう。こういう、ぼくからすると気味の悪い人間工学のようなものが進んでいて、人々は、まんまとそれにはめられている。これは“スマートな”ファシズムじゃないか、ってぼくなどは思うんだけど。

アシュレイ・モンタギューという、タッチングの重要性を論じたり、愛についてのユニークな研究をした人類学者がいますが、その人の晩年の本に、「非人間化の時代」というのがある。そこで彼が批判の矛先を向けたのが、行動主義 (behaviorism) です。20 世紀のアメリカの主流社会の思想的バックボーンは行動主義だったんだな、と痛感させられる。基本的にはパブロフの犬みたいに、人間の心理や行動は操作である、という考えですね。

現代日本の政治や行政の舞台でも、テクノクラートたちが、合理的で、経済効率のいい、彼らなりの理想郷に向けて忙しく動き始めているのではないか。人々を予測可能で、操作可能なパブロフの犬みたいな存在と見なして。そういう筋道が日本でもいよいよ本格的になってきている気がする。

これに対抗する思想の核として、「雑」があるのかなと、考えています。

高橋：増田レポートは、一応説得力があったじゃないですか、やっぱり地方はこのままだと枯死しますと言われてね。

大岩：あの説得力っていうのも統計の力です。数をいきなりつきつけるというのが、テクノクラートのやり方です。でも、それに対して反論するのに、同じ土俵に乗ってはいけないんですね。人間が生きていくっているのは、数の問題ではないんだ、と云えばいいんです。

地方消滅論への反論にはなかなか読み応えのあるものがあって、いろいろ学ばせてもらっています。確かに人数は減っているけど、こんなに活力のある町や村がある、という例はたくさんある。人口の減少と活力の減少は比例しないどころか、逆比例する場合さえ少なくない。統廃合されて村じゃなくなった集落が、いや、私たちは「村」を続けます、という宣言を出したりする。そういうような例がいっぱい各地で報告されている。ここには、「雑」の思想が息づいている。

そもそも「過疎」「限界集落」などという言葉自体がおかしいわけですけど、そんなイデオロギー的に偏った言葉を平気でこれまで使ってきたことを、まず反省しないと、ね。江戸時代の終わり、人口は今の4分の一の三千万にすぎないというのに、6万以上もの多くの自立的な村落共同体があった。そう見れば、「まばらすぎる」とか「もう限界だ」とかいうのは、都市から見た、そして権力者から見た偏見にすぎない。「過疎」とか「まばら」とかという時の基準は何か、ということが問題なんです。差別語と言ってもいい。それは、マクロ経済やグローバル市場や「費用対効果」といった基準に合わないから、効率的じゃないというだけのことです。山村に散らばって住まれると、道路も水道も整備しなきゃいけない、冬は除雪もある、年寄りの面倒をわざわざ見にいかなきゃいけない。「なんという無駄だ！」と、いう視点です。

高橋：それって計量化しているわけですね。要するにみんなおなじ個体、クローンみたいなものだから、そういう発想ができる。そこで想定されているのは、もはや「ひとり」じゃなくて、単なる、同じ性格を持った「個体」に過ぎないんです。

大岩：地方とすれば、頭にくるでしょう。だって、そもそも、地方消滅論で人々を脅かしているのは、実は、地方からの人口流出を促進し、荒廃させる政治をやってきた張本人たちですからね。

まあ、そういうふうにして中央が出してくることに對して、反論や對抗の氣運が生まれてくるわけで、その意味で、今は面白い時期かもしれない。ぼくらの方の思想的な力が鍛えられていくのかもしれない。非効率の思想としての「雑」を、育てたいな。

宮本常一じゃないけど、これを氣に、効率と正反対の不便な方へ、「雑」の方へ、面白がって向っていく人たちもたくさん出てきている。そういう人たちが昔の寄り合いみたいなかたちで、三日三晩ずっと話し合う。すると、そこから自治が甦ったり、民主主義が再生したり。高橋さんの言うラジカルな民主主義ですよ。

ぼくもそういうのを、「雑の研究」でしっかり取材したいな、と思っています。

3. リダクショニズムへの抵抗としての「雑」

大岩：まとめると、「雑」というのは近代的合理主義やリダクショニズム——還元主義ないしは縮減思考とも訳されると思いますが——に対する批判ということになるんでしょうね。単一性、画一性、効率性などへと「リデュースする思想」に対する批判。そして「メジャラビリティ（計測可能性）」という原理への抵抗。雑を通して、そういうことをぼくたちは考えようとしているのかな、と。

高橋：要するに「個体」に戻す、ということだと思えますよ。手続きとしては具体的な場所、具体的な事例、具体的な人というかたちで考えていくことになるのかな、と思います。

大岩：量子力学も、それまでのニュートン以来の物理学におけるリダクショニズムに対するラジカルな批判だったわけです。さっきの行動主義じゃないけど、原因と結果の一對一的な対応、一定のインプットにはこういうアウトプットがあるといった予測可能性、計測可能性といった世界観に対する批判でもある。

高橋：量子力学には全部それがない。そもそも世界は予測不可能だという考え方ですね。

大岩：複雑系で言う「雑」もあります。

高橋：複雑の雑ですね、考えてみれば。ぼくは作家なのでよく思うんですが、文学は複雑系そのものなんですよ。

単純なものに見方に、ずっと反対し続けてきた。

単純化の考え方というのは、過去を持たないということです。例えば、70年前に戦争が終わった。もし、その戦争が、ぼくたちにとって、70年前に人が死んだという記録と、50万人の死という記録があったというだけなら、そこには記録があるだけで、「過去」がない。戦後の問題にしてもアジアに対して謝罪する必要がないというの、過去がないからなんです。それは「終わった」ことで、現在の我々とは何の関係もない。でも、過去は当然あるでしょって文学は思う。だって具体的にいうと、本の中に過去の作家たちの言葉は生きている。つまり今読むと、今生きている人間よりも生きているように聞こえる、それは全部想像力のうちですよ。過去は終わっていないから、謝罪も戦争責任も存在している。

世界はぼくたちの見方によって解釈によって姿が変わっていく。過去なんてまさにそうじゃないですか。過去なんて、ないといえられないし、あるといえはある。どういうありかたをするかと

いうと、各人の想像力の中でそこに触手を伸ばしていけばその存在を触知できる。

それは想像力の問題だし、ことばの問題なんです。

『ぼくらの民主主義なんだぜ』の中でひとつ例を挙げたのが、イリヤウリツカヤというロシアの作家がクリミア問題について発言した件です。ぼくがすごいと思ったのは「現代思想」でクリミア問題の特集を作家に頼んだことです。普通に考えると領土問題なので当然政治学者とか領土問題に詳しい人が出てくるのに、あえて作家を出した。どうしてかっていうとクリミア問題というそれはロシアの領土かウクライナの領土かといって論争になる。それぞれの側が歴史をだしてきて、こう書いてあった、だからロシアのものだとか、ウクライナのものだとか主張し合う。ここには、歴史記述があるだけなんです、それに対してイリヤウリツカヤはクリミアの描写をしています。彼女は小さい頃からずっとクリミアに行っていた。自分がよく知っている場所で、いろんな民族が行き交うエキゾチックな地域だった。イリヤウリツカヤはそのことを非常に美しい文章で且つクリアに描いた。みんなクリミアに関する文章を出してきて、誰のものだという主張はしたけれど、クリミアが何なのかを教えてくれる人はいなかった。彼女が書いたものの中にクリミアは浮かび上がってくるけれど他の人の書いたものにはクリミアがなかった。

クリミアの複雑さを描くことができたのはウリツカヤだけで、あとの人たちはクリミアを単純化した。それはクリミアを殺すことだと思います。単純化することでクリミアの歴史も自然もクリミアの持っているもの全部捨象して誰かの領土だという話しかしない。これが複雑性に向かう作家たちの言葉、今のような時代には最良の反撃だと、ぼくは思いました。

ウリツカヤが言っているのは、世界はあなたたちが言っているよりもっと複雑だ、ということです。

クリミアは誰かの、どっちかに属している土地だという存在ではなくて、もっと複雑なものだという。けれど、社会が気にしているのは、その土地がどっちに属しているかということだけなんです。でもそのことに気がつかないようになってるのはぼくたち自身が、ある土地があればだれのものかというふうに、単純化した思考に落とし込まれているからなんです。

大岩：そういう意味だと樺太とか北方領土とかもね。

高橋：同じですよ。ウリツカヤがいうように、だれの領土であっても構わない、クリミアが何かを教えてくれれば、とは考えられないその考え方は、まさに複雑の「雑」に根拠を置いています。

大岩：今、高橋さんの言われたことはとても重要だと思う。ぼくはこの十年あまりブータンに通っていますが、一方でメディアなどがつくり出すステレオタイプ化され、単純化される薄っぺらなブータンのイメージがどんどん、世界に広がり、それがまたブータンの内側にも逆輸入されていく。それはそれでとても興味深いんだけど、ぼくのように深入りして、ますます奥地へと入り込んでいくと、逆に、ぼくの中のブータンはどんどん、厚みを増して行って、「雑然」としてくる。で、この「雑としてのブータン」こそがテーマかな、と思えるようになった。

4. 雑としてのエコロジーとアースデモクラシー

大岩：複雑性と多様性をもって、還元主義的な文明に対して、あるいは経済効率主義に対して、

対抗していく。ぼくたちの共同研究では、そういう考え方を孕んだ豊かな概念として「雑」を見ていこう、と言えるでしょうか。

もうひとつ、ぼくの興味に引きつけていうと、「雑としてのエコロジー」という視点があるんです。前の「弱さの研究」の時にも、終わりの方で、エコロジーへの道筋が見えてきたという感じはあったんですが。人間中心主義的な進化主義や、弱肉強食、自然機械論のような古くさい考え方が、実は未だにぼくたちの意識を支配しているわけで、そこでは、強者としての人間が、弱き者、劣った者としての動植物を支配する、という世界観が生きている。

文化人類学の中でも、例えば北方の先住民、狩猟民たちが、動物というのを単に人間世界のメタファーとしてではなく、実際にそれに「人格」を認めた上で、彼らを含んだ社会を想定しているのを、そのまま、まともにとりあげなきゃいけないと考えるようになってきた。

あと、ぼくが今気に入っているのが、プラント・インテリジェンス（植物の知性）についての研究です。

高橋：アイヌもそうですね、彼らにとって、単なるメタファーじゃないですからね、熊にしても。

大岩：宮沢賢治がそうでしょ。宮沢賢治は決してメタファーとしての動植物を描いていたのではなくて、動植物をはじめ無生物も含めた者たちからなるコミュニティや社会を考えていた。それって今から思えば、すごくラジカルなエコロジーの思想ですよ。それをインドのヴァンダナ・シヴァは、アース・デモクラシーという言葉で表現していますが。デモクラシーのデモというのは人間のことだから言葉が違うように見えるけれど、そこは少し拡張解釈して考えると、生きとし生けるもの、世界を成り立たせているものたち全体が、この世界をどういうふうにしていくのかについて、考え、議論に参加するという視点が出てくる。今では、多くの科学者が、「すべての種が投票権を持った、国連ならぬ全生命連合」のようなものに大真面目に言及したりしています。

高橋：宮沢賢治は完全に、アース・デモクラシーです。要するに熊も犬も人間もヨタカも全部同じレベルの存在で、「オッペルと象」とか人間が出てくる作品もあるんだけど、よく見ると人間と動物のレベルが一緒なんです。どっちかというとなんかのレベルの方が低いくらい。それは比喩、メタファーじゃなくて、世界はそうなっているじゃないかと、彼にはそう見えていたんです。

大岩：「なめとこ山の熊」は特に好きなんですけど、あれは人間界をうつつだすための寓話ではない。文字通り、動物たちや人間たちを同列の参加者とした一種の民主主義、社会のあり方を考えている。賢治からずいぶん遅れをとったけど、ぼくらもやっとそういう時代にきているんじゃないかと思う。

高橋：熊と人間の民主主義ですからね。種が違うのにそれが可能だっていう、ものすごくラジカルな話です。

大岩：そういうふうを考えていかないと未来がない。ガイア仮説というのはそういう民主主義の話を、科学のレベルで言っているわけで。「雑」の議論もそこまでもっていけるといいんだけど。

高橋：面白いですよ、地球民主主義。例えばジャンルでいうとギリシャ民主主義の専門家に来てもらってもいいし、もっと幅広い地球民主主義的な考えを持って活動している人とか、宮沢賢治の研究者でもいいかもしれない。

大岩：ダグラス・ラミスの「ラジカル・デモクラシー」はどうですか。彼の数年前の本に、ガンディーが構想した「70万の村落共同体からなる共和国としてのインド」についてのものがあります。そのガンディーの思想が、ラジカル・デモクラシーのラミスが歩みよっていくところが面白いと思ったんだけど。

また、動植物や菌類の知性、さらにガイア仮説などの研究者もいいですね。「利己的な遺伝子」のリチャード・ドーキンス的な還元主義を、どう批判するか、を聞きたい。生きものの知性ということでは、やはり、ぼくたちをとりまく唯脳主義的な思い込みをなんとかしたいですね。

高橋：そう全部脳で、肉体がない。

大岩：特に日本人は脳が好きじゃないですか。

高橋：脳科学が大好きですよ。脳がこういうもんだから、人間はこうなんだって考える。脳還元主義ですよ。

大岩：人間の「強さ」を体現しているのが脳。脳が強さ、となれば、ほかの生き物は弱くて、劣っているから、だめだということになる。

高橋：だめですよ、「考える」だけの脳を持ってないから。

大岩：無脳＝無能だ。

高橋：能力の能とブレインの脳が一緒になっちゃってる。

大岩：脳の有無は本質的じゃないと考え、脳から一度インテリジェンスから切り離し、脳と能を切り離すのが、新しい科学ということかもしれない。

高橋：そもそも植物には脳がないです。デモクラシーというのは、本来は、違っていてコミュニケーションするのが難しいもの同士が一緒になんとかやっていく、ということです。最初は同じ言葉話す個人の小さい共同体からはじまって、人間と植物と動物の民主主義に至る。それは面白い考えだと思います。たとえば、植物は言語を持っていないので、こっちが彼らの言葉を聞き取るように努力しないとイケない。というようなことを考えていくとすごく面白い。

5. 民主主義を「雑」から考え直す

大岩：「雑」というコンセプトをコアにして、民主主義を根本的に考えなおしてみる、と。

高橋：今の我々がお仕着せで受けとっている民主主義がいかに狭いか。人間の民主主義のそのまたごく一部を民主主義として恭々しく頂いている。

大岩：しかもそれって国際的にみても本当に狭い。

高橋：それなのにほとんど気付けていない。

大岩：貧しいですね。そもそも民主主義はまだ始まってないってことかな。

高橋：始まっていないですよ、完全に。古代アテナイで始まったけど、決めるということで投票とくじ引きを同時にやったわけです。それぐらいアテナイの人にとっても投票はだめなものだった。それでくじ引きを中心にやったんですよ。

大岩：国家などという枠組みのない場所で、その多様性を犠牲にすることなく、一種の調和をつくっていく。これまで存在したすべての共同体、民族、文化にそういう何等かの知恵があったわ

けだから、そこに注目しなきゃだめですよ。

高橋：なのに今はほとんどのメディアが今あるシステムを前提として受け入れた上で何でも議論しようとしている。

大岩：『ハッピー・リトル・アイランド』という面白いドキュメンタリーがあります。ギリシャの危機で絶望した若いカップルが、新天地を求めて地中海の島に移住していく話です。映画は、現地のおじいさんやおばあさんたちに話を聞いていくんです。都会でみんな金を追いかけているけど、そんなの幻想じゃないか。こうやってうまいものを食べて、うまい酒飲んで、しょっちゅう踊って暮らしていれば、他に何が必要なのか、と。

自給型の暮らしがまだ生きていて、都会ではもうはやらない社会主義的な考えや、伝統的な共同体精神みたいなものがまだまだ生き生きとしている。これに女の子の方はあっさりまっちゃうのに、男は悩んでしまう。それでだんだん2人がうまく行かなくなって、別れてしまう。

今のギリシャについて、メディアは、バカの一つ覚えみたいに、都会の銀行の前に列をつくって不平を言ってる人たちの姿しか映し出さない。まさに還元主義ですよ。多様で重層的な現実をあのイメージに切り縮めてしまって。「ああいうふうにならないように、せつせとグローバル経済を勝ち抜きましょね」って。

高橋：ギリシャ・バッシングをしてますよね、つまり働かなかったからつけがまわってきたんで、いい気味だって。あれは生活保護バッシングと一緒にですよ、お前らにそんな権利ないよ、っていう。

ちょうどその後、スティーグリッツとかクルーグマンといった優れた経済学者たちが、あれはどっちかというドイツが悪いと言い出した。そもそもギリシャ債務っていうけど、ほとんど借りたお金は返済金として債権国に戻ってゆく。ギリシャに金は入っていない、と書いてあった。あるとき借りてそれからずっと、どんどん使って返してないわけじゃなくて大半はドイツを筆頭とした債権国の銀行に入ってる。巨大債務をずっと払い続けなきゃならない構造です。

大岩：日本の「地方消滅＝地方創生」論への、ひとつの回答は「ギリシャ」なのかもしれないな、とふと思う。それは、銀行の前で年金を要求することしかない人たちのギリシャではなく、「ハッピー・リトル・アイランド」としてのギリシャです。地方へ分散して、システムなんてほったらかして、のんびり暮らそうぜ、みたいな。

高橋：見ようによってはギリシャは進んでますよね。2500年前から今の事態を予測していたのかもしれない。

大岩：連続性があるはず。2500年生き続けているものもある。そういう意味では、ギリシャは注目かもしれない。

高橋：今の民主主義がちょうど大きい問題になっている時に、原理までさかのぼって考える役割があると思います。

強行採決されたからで民主主義が壊れたという考え方があるでしょう。けれどぼくはそれには反対なんです。代議制民主主義だから、数の多い方が強行採決しても大して問題にはならないんですよ。それは本来代議制民主主義がもっている反民主主義的な部分がでてきただけなんです。もちろん原理としての民主主義から言うなら、代議制民主主義の反民主主義な本質を露骨に出さ

ないために強行採決しないとか、というルールがあるでしょ、と言うことは必要ですよ。でも、強行採決は、民主主義の本質を壊したとは思うけど代議制民主主義の本質は壊していない。そういうふうにいる人もあんまりいないんで、一緒になっちゃってる、と思います。これはじっくり考えればわかるんですが、みんな反対する人も含め考えていないと思うので、ぼくたちはもっと長いレンジでものを考える必要があると思います。

今みんなが民主主義が問題だと言っているときこそ、ぼくたちは 2500 年前のことを考える、ネイティブ・アメリカンの民主主義を考える、っていうふうにするのも大事だと。こういう研究のしかた自体が「雑」で、それがまたいいのかなと思っています。

注：ディスカッションそのものは 2015 年夏に行われたが、本稿はその後、元原稿に加筆を重ねて現在の形になったものである。なお、この一年に出版された以下の著作を参照していただきたい。

高橋源一郎『ぼくらの民主主義なんだぜ』（朝日新書）

高橋源一郎『民主主義ってなんだ？』（河出書房新社）

辻信一『弱虫でいいんだよ』（ちくまプリマー新書）

辻信一『タシデレ！ 祈りはブータンの空に』（DVD ブック、SOKEI パブリッシング）

※本報告書は、国際学部附属研究所共同研究「雑の研究」の中間報告書である。